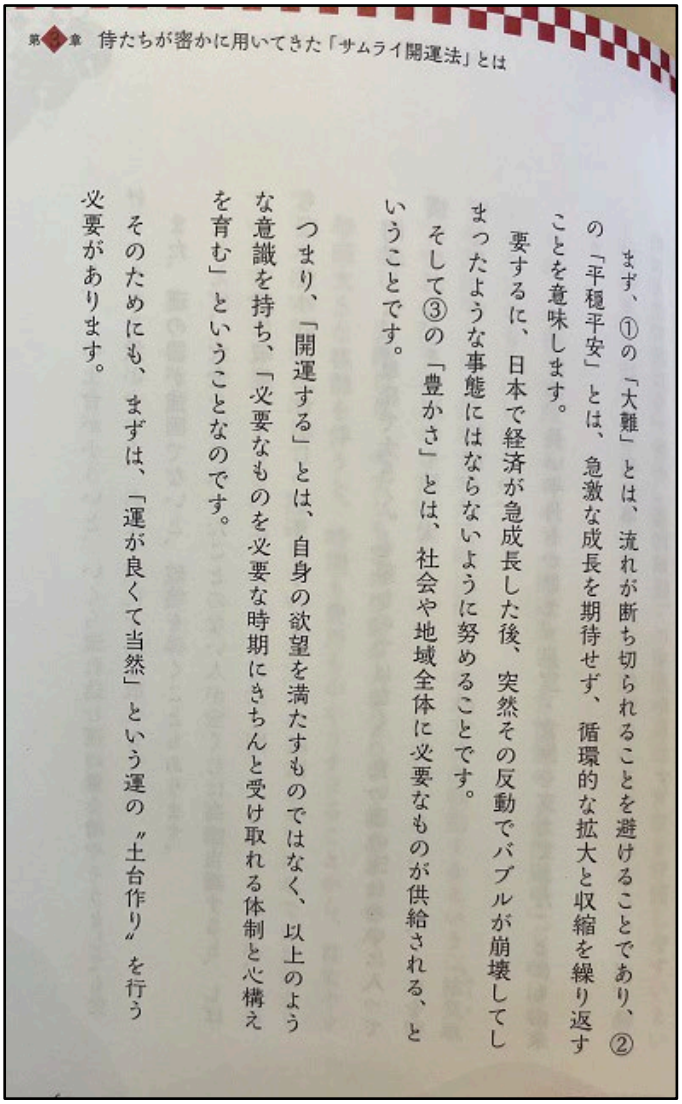
2024 年 5 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 5 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



第2章　侍たちが密かに用いてきた「サムライ開運法」とは

まず、①の「大難」とは、流れが断ち切られることを避けることであり、②の「平穏平安」とは、急激な成長を期待せず、循環的な拡大と収縮を繰り返すことを意味します。

要するに、日本で経済が急成長した後、突然その反動でバブルが崩壊してしまったような事態にはならないように努めることです。

そして③の「豊かさ」とは、社会や地域全体に必要なものが供給される、ということです。

つまり、「開運する」とは、自身の欲望を満たすものではなく、以上のような意識を持ち、「必要なものを必要な時期にきちんと受け取れる体制と心構えを育む」ということなのです。

そのためにも、まずは、「運が良くて当然」という運の〝土台作り〟を行う必要があります。

なんだか、今年の 1 月 kissinger に始まって先月の母まで、逝ってしまった話しばかりが続いたような気がする。亡くなったからと言って、この世にいなくなったと言えるのかどうかは分からない。ほとんどの毎日を顔見て過ごした人なら話しは別だと思うが、若い頃は『この人のように生きたい』と思った人は、その時既に亡くなっていた人ばかりだった。今月は、自信は無いがもう少し違う様子で書きたいと思う。

画像は、有名な秦氏の末裔が書いた書籍の 1 ページになる。この国にとって重要な役割を果たして来たであろう、秦氏の家に伝わる【運】について書いている本に興味を持った。その運のポイントを描かれた箇所がこのページになる。『①大難を避け　②平穏平安を招き入れ　③豊かさを広げる』ことになります、 とあり、その続きが画像のページなる。また画像をよく見ると右上に【侍たちが密かに・・】とあるが、何となく感覚で今まで掴んでいたが、武士とは攻める、侍とは守る、明確な違いがあるそうだ。

そう考えると、この【運】の三つは捉え易いような気がする。たしかに①と②はそのままで、結果そうであれば③が生じるのであろうか。実は①も②も、個との理解も成立するが、③を見ると、いや『大難を避け』る事も、『平穏平安を招き入れ』る事も、個ではなく公のことだと読めてしまう。

ここで、この家柄について自身が書いている事に少し触れる。元々この家は九州辺りで勢力を持っていて、それで神武天皇の九州征伐の時に敗れた側で、以来天皇家を裏で護る立場になったと書いている。となると秦一族は何度かに亙り渡来して来た事になる。

空海は、香川の佐伯氏から生まれ母方の叔父に論語を習ったそうだが、叔父は阿刀大足もこの血筋から出ていると聞いたことがあるし、平城京から平安京に遷都する時も、長岡京を 10 年挟み、わざわざ迂回することを勧めたのも、現在の御所の位置を桓武天皇に勧めたのも、納得が出来る。地政学的に京は、北東に琵琶湖を控えるなどエルサレムにそっくりだという。其の礼にと桓武天皇から東寺をプレゼントされたのを袖にして、高野山に行ってしまうなど普通は出来ない。その様に考えれば、遷都のスポンサーになり、祇園はシオンだと噂さがあるなど、秦氏の思想的背景は広隆寺に留まらず、平安京全体に色濃く残されている。

もう一度今回の書に戻って『侍』として記されていて面白いのは、あの『蛤御門の変』である。一時期徳川最後の将軍慶喜に興味をもって何冊か読んだことがあり、この事変のことは流れも含めてよく理解しているつもりだった。急進的になり過ぎ、周りから総スカンをくって京を追われた長州が、ヒステリーを起こしたとしか思えぬ判断力の欠如で、天皇を拉致しようと御所に攻め入った時のことである。あと少しで内裏に迫ろうとしていた長州を防いだのは、急遽駆けつけた幕府軍と薩摩軍によって阻まれた。となっていたが、実は天皇家の守護にまわっていたこの氏の組織が阻んでいて、敗走に追いやったのが先の二つの軍だというのが正しいらしい。但し、この活躍には後日談があり、その時のあまりの強さに武士は慄き、維新が成った暁には、自分達を守るため、この組織は解体の憂き目にあったと書いている。何の裏付けも無いがあり得る話しだと思う。

さて、言う、言わぬは、別にして、もう分かってしまっている事だが、このまま左脳を基礎とした社会作りは、決して人を幸せにすることは無いだろうと思う。つまり 先の『豊かさ』の定義である。この書では画像中央③に『社会や、地域全体に必要なものが供給される』とある。書き出しの神武天皇から明治維新まで、いったいどれだけの時間が流れているのか気が遠くなる。自分より足が速い馬に乗って走り、化石燃料を使って空まで飛べるようになるだけの時間が流れているのだが、時代は一向に豊かにならない。国が負けるのは、いつの世も、たとえ国が負けようが、自らはその後の優位な立場を確保しようとする世知辛い輩に由る。

今はもう少し間の抜けた人によって、自衛隊は軍隊に切り替えられ、今まで米国の尻に隠れていれば良かったけれど、先頭にとは言わないだけで、並んで立つ事は先頭に立つ事だし、気がつき横を見ればいるはずの米国がいない、なんて事は想像しないのだろうか。自分の頭の蠅は自分で追えと言われればその通りだが、金はあっても力の無い優男が、見栄を切るとロクな結果にはならない。まあ、金なら持って行ってくれても良いが生命は困るが正しいと思う。

ひとに働かせて自分は遊んで暮らす事を、つまり不労所得を好としている民族とは違い、労働は美徳だと考えている遺伝子が宿るお国柄だから良いのだが、ふと覚めて美徳って何だと考えてみると、やっぱり左脳が考える事柄から離れられていないのではないかと思えて来る。だからって『正しさ』に背を向けて生きている訳ではない。人格化される神が作り給うた世界ではなく、あくまで性格が異なる陰陽・木火土金水それぞれの力の相克と相性の強弱に依って事象に現れているに過ぎない。よって左脳に過度の期待は虚しい。

先月の『月間通信』の表裏それぞれの末尾に書いた通り、多様性が認められようとも、正しさが消えて無くなる訳ではなく、ひとは不必要な事を多く考えている。不必要な考えを限りなく除去すると、正しさが明確になり、正しさが明確になるという事は、いくら頑張っても人智で生命を生み出せない、その生命を生み出すエネルギーと一体と成れる。そうすると左脳ではなく、右脳の存在が浮上して来る。

野に咲く花は概ね小さいが、それでも咲いている。見る者を圧倒するが桜ばかりが花ではない。どちらかを選べと言われてもそれは無理な話しだが、造花すら綺麗だと多様性に与する人とは、否定はしないが共にいられない。『成長』という強迫観念から逃れてみたい。自分以外からいい影響を出来るだけ得たい。得る事が出来れば、ひとにも亦いい影響を自分から感じ取ってもらえるのかもしれないと思う。

有限会社アルファー：吉田清一郎